

農的生活の豊かさとコミュニケーション

加藤 貞 通

1. 食べることは農業的行為である

すべての人間は何かを食べて生きている。人間と自然との関係に注意を向けるとき、食べることの重要性にはすぐ気づく。しかし同時に、食べ物に関してこれまで気にもとめずにいたことや、ほとんど知らなかったことの多さにも気づき、驚く。衣食住という昔から使われてきた語句が示すとおり、食の基本的重要性は元来認識されていたことであるから、現代人は食の重要な意味合いを知らないとは言えない。むしろ、多くを忘れかけていると言うべきかもしれない。アメリカの環境文学者の一人ウェンデル・ベリー（1934-）は、「食べる喜び」というエッセイのなかで次のように述べている。

食べることは農業的行為であるという主張から始めてみよう。食べることは、植え付けと収穫から始まる食物経済の年毎のドラマに終止符を打つ。しかし、もはや食べる人の大部分は、本当にその通りだと意識してはいない。彼等は、食べ物を農業の産物だと、多分考えているが、自分たちのことを農業への参加者とは考えていない。彼等は自分たちを「消費者」と考えるのである。更にその先まで考えを進めて初めて、彼等は自分たちが受動的な消費者だと自覚する。

(Berry 321)

たしかに現代の日本人——都市の住人が大半を占める——は、おおかた、自分たちの食べる物が農場で生産されるとは分かっている、どこにある何という農場で、どのような知識や技術が使われて生産されたかについては知らないであろう。生産・加工・流通の過程で有害な化学物質が使用されていないか、環境や農民に被害は発生していないか、食品に有害物質が残留していないか、加工食品の材料は本当に表示どおりか、輸送距離や包装、広告のコストは食品価格にどれくらい含まれているか等々、よく分からないことばかりの食品を買い、食べている。ベリーの言うように、食べる人の大部分は受動的であり、自分は「消費者」だという自覚は持っているが、一連の農業のプロセスのなかに行為者として参加しているとは考えていないだろう。

農家と食べる人、すなわち食物生産者と消費者の分化は、ベリーによると、農業が工

業化された結果にほかならない。工業化の一般的特徴の一つは、分業（または専門分化）である。農業の工業化とは、単にトラクターなどの機械や肥料・除草剤・殺虫剤などの化学物質が農場に導入されたというだけのことではない。人々が、工業的な農家（食物生産者）と工業的な食べる人（消費者）に分化したということである。消費者という受動的人間集団は、大部分、工業化の結果として生じてきた。

工業的な食べる人は、食べることが農業的行為であると知らない人であり、食べることと土地との繋がりをもはや理解できないか創造できない人で、それゆえに必然的に受動的かつ無批判な——要するに、犠牲者である。食べる人の心のなかで、食べ物も農業にも、土地にも結びつかないとき、その人は間違った、危険な、文化的健忘症にかかっている。（Berry 322）

工業化は現代の日本やアメリカ社会の基本路線であるから、専門分化は農業だけでなく産業のあらゆる部門と生活の隅々にまでおよんでいる。消費者が自分の買う商品の産地や生産者、方法その他の履歴を知らないのは農産物に限らない。すべての商品について履歴をよく知りえない。また消費者が商品の製造・販売のプロセス、または履歴をよく知らないことは、製造・販売する側にとってはなにかと好都合である。したがって消費者は、他の商品について無知であることと同様、食物についての自分の無知を至極当然のことと考え、自分が犠牲者だとはまったく思いもつかない。それどころか、テレビやインターネット、パンフレットなどの広告による工業製品のカタログショッピングと同様、農産物や調理済み食品を、直接に見て確かめもせず、インターネットや携帯電話で購入し、さらに帰宅途中、携帯電話によるリモコン操作で調理済み食品を温めておくといったIT産業による生活イメージ広告を鵜呑みにして、最先端の「豊かな」文化的生活と受けとめる消費者は多いだろう。ウェンデル・ベリーの目には「その人は間違った、危険な、文化的健忘症にかかっている」と映る。（322）

このような「間違った、危険な、文化的健忘症にかかった」事態に対処するためのウェンデル・ベリーの提案は、「責任を持って食べる」ことである。どのようにすれば「責任を持って食べる」ことができるのかといえば、ベリーの考えでは、そのためには、食べ物の履歴についてできるだけ知り、製造流通販売のプロセスを生産者までさかのぼり、できれば生産者と直接に取引し、できる限り自分で作物を育て、自分自身で料理して食べる、そのようにして食べることと土地の繋がりを理解し、繋がりを維持する生活の技を取り戻すことが必要である。食べることと土地の繋がりの生命循環のなかに自分を位置づける想像力が能動的に働くようになれば、文化的健忘症が治癒し心身の健康が

回復できる、とベリーは言う。(321-327)

こういう提案は、ベリーがアグラリアニズム (agrarianism) と呼ぶものに由来する。彼は、アグラリアニズムは思想であるより先に「実践であり、一組の態度、忠誠心、熱情である」(Berry 239) と述べている。ベリーのいうアグラリアニズムは、エコロジーの発想を深く取り込んでいることもその特徴である。彼の唱えるアグラリアニズムは、かつて1930-40年代の米国において盛んだったアグラリアニズム——従来は「農本主義」と訳されてきた——とはいくつかの点で異なっているのだが、エコロジー思想を吸収している点は、とりわけ大きな相違である。自然界の生命・生活を常に意識し、ひたすら自然界の生命に呼応して生活を営もうという姿勢が鮮明であるので、「農本主義」という古めかしい訳語ではなく、「農的生活主義」と訳す方がぴったりするように思われる。それゆえ、以下においてはこちらを使用する。ベリーはこの農的生活主義を工業主義 (industrialism) に対抗させ、工業主義は文化である以前に経済であるが、農的生活主義は経済であると同時に文化であると述べている。また、工業主義が国家的経済や、グローバルな経済を志向する傾向をもつのと反対に、農的生活主義は常にローカル (地域の) 経済を形成しようとする傾向をもち、地域の土壌、動植物、気候、地域の共同体 (ローカルコミュニティ) に根ざす文化と一体である点をベリーは強調する。(236-248)

ウェンデル・ベリーと同様、農的生活を高く評価し、文化的にも、政治・社会・経済的にも農の重要性を主張する人々は増えており、彼らはしばしばニュー・アグラリアン (New Agrarian) と呼ばれることもある。例えば、バーバラ・キングソルバー、ノーマン・ウィアツバ、エリック・フレイフォォグル、ウェス・ジャクソン、ブライアン・ドナヒュー、その他、エッセイスト、哲学者、法学者、農学者等、様々な分野に渡っている。彼らの主張を実践する農民、特に有機農業を営む人たち、および有機農場と提携する都市住民たちも増加している。近年の米国の社会状況をみると、農的生活主義の普及は、現代アメリカのカウンターカルチャー (対抗文化) と見なすことができる域に達しつつある。

2. 人類の歴史とともにある農の営み

実は日本でも最近、ウェンデル・ベリーの農的生活主義と共通の要素をもついろいろな動きが見られる。例えば、有機農業や自然農法、不耕起栽培、冬季湛水稲作などによる農場経営の試み、農産物の長距離輸送や輸出入を避け、地域で生産・消費することを目指す地産地消や身土不二的の考え方、生産者と地域の消費者間に顔の見える関係を築き

保持する提携農業運動（アメリカではCSAと呼ばれている）や、生産者が値段をつけ直接販売するファーマーズマーケット、地域の有機農産物による学校給食と食育の試み、都市住民が棚田を復活維持しようという棚田運動、下流域の都市住民や漁民が上流域の山地で植林し、間伐を手伝ったり、森林税の形で協力したりする運動、さらには都市労働者が田舎に帰り農業を始める帰農や、小規模ながらも市民農園で農作物生産に参加する風潮など、いろいろな例をあげることができる。

言うまでもなく、上述の風潮は社会全体と比較すれば、まだまだ小さい流れで、大部分の流れはこれと逆である。社会の大部分を占めるのは、一口で言えば、グローバリズムにそった流れである。その流れを支配するのは、生産性と効率を第一に重視する考え方で、金融、商業、鉱工業、サービス業（医療や教育も含まれる）、それに農業（牧畜、林業や水産業も含まれる）を貫く工業主義（インダストリアリズム）である。この考え方と、規模拡大の追求および、それを促進する市場競争は切り離せない。日本では2007年の4月からあるレベル以上の規模の大きな農家（個人は4ヘクタール以上、集団は20ヘクタール以上の農地を耕しているという条件つき）を優遇する農業政策が実施されることになった。WTOの新貿易協定交渉の圧力を背景とする政府の苦しまぎれの政策であるが、生産性の低い小規模農家や兼業農家が淘汰される結果を招くであろうことは、政府も十分承知の上と思われる。そこには世界市場での競争力を備えた農業の担い手だけが残ればよいという厳しい姿勢が現れているが、果たして期待どおりの担い手が残れるかどうか保証はない。世界市場の情勢はますます厳しく、競争相手はいずれも巨大である。

農業をとりまく情勢の厳しさについて、経済学者の宇沢弘文は、『社会的共通資本』の中で次のように述べている。

日本の農業はいま、1930年代の大恐慌以来、最大の危機を迎えている。農業の存続そのものが危ぶまれるという状況にあるという点からすれば、日本農業は、その形成以来、最大の危機といってよいかも知れない。（宇沢 46）

「その形成以来、最大の危機」とは、いつの時代からのことであろうか。宇沢は、とてつもなく古い時代、人類が始まって以来この方のことを意味しているようである。

私は、農業という概念規定より、むしろ農の営みという考え方にもとづいて議論を進めた方がよいのではないかと思う。／ 農の営みは人類の歴史とともに古

い、というよりは、人類を特徴づけるものとして農の営みの意味づけが存在するとさえいってもよいのではなかろうか。（宇沢 47）

産業の一部門としての日本の農業が世界市場に生き残れるか否かというよりは、人類の歴史が始まって以来長く続いてきた、人類を特徴づけるものとしての「農の営み」が失われれば、人間らしく生きる条件が失われてしまう、その意味でかつてない大変な危機だ、と宇沢は言っているのである。

日本では食糧生産をやめ、高価な工業製品だけを生産・輸出し、海外のどこかの国から必要なだけ安い食糧を輸入すればよい、などという安易な国際分業論を宇沢は強く批判している。しかし、「農の営み」が消滅すれば、人間らしく生きることができなくなるという意味の重大さを理解できない者は多数いて、国際分業論は今も健在である。すでに人間らしい心が失われつつある兆候は社会のいたるところで観察されるにも拘わらず、国際分業の仕組みは極端に実現しつつあるのが実情である。食糧自給率がカロリーベースで40%、穀物自給率となると、トップのフランス186%、カナダ120%、アメリカ119%、ドイツ111%、イギリス109%をはるかに下回り、日本は28%（飼料用を含む：平成15年）でOECD加盟30ヶ国中28番目、173の国・地域中124番目（徳野貞雄62）という数字が、工業立国のかげ声の下にどんどん国際分業に向かう日本の危険な傾向を物語っている。

ただし、GNPやGDPなどの数値と同様に、食糧自給率の数値にも幻惑されないよう用心する必要がある。食糧自給率40%は余りに低いからせめて45%に上げることを国家目標にしよう、そのためには小規模農家を切り捨て、担い手として生産性の高い大規模農家支援態勢を作らなければならない、という論法は、宇沢の説く「農の営み」の重要性を捉えそこねた議論である。「日本が世界の農産物貿易の1割を輸入」（徳野60）する輸入大国になってしまった要因はどこにあるのか、また、それほどの大量輸入を続ける必要が本当にあるのかと問い、人類発生以来の「農の営み」の意義に照らしあわせてみるべきである。

農村社会学者の徳野貞雄は、著書『農村の幸せ、都会の幸せ』の中で日本の消費者が「化け物」になったと嘆いている。

化け物になった日本の消費者

現在の日本人の多くは、自分で食べ物を作ることができなくなりました。農産

物ばかりではなく、かつては自分たちで作っていた漬け物やおもち、料理ですら、自分ではできなくなっています。

消費者である都会の人間にとって、米もナスもトマトも、ただの「商品」「食品」です。だから、より便利なもの、より安価なものを食べようとします。「魚は骨があるから嫌。骨抜き魚がいい」と、処理をしたものでないと売れない。野菜は全部、ヘタを切り落とす。ごぼうや里芋は、自分で皮を剥くのも邪魔くさいし、なにより手が真っ黒になるから嫌だといって、添加剤で漂白しているものを買う。これらはもう加工品と言うべきです。

そういう変な、「化け物のような消費者」を、現代の日本社会は創り出したのです。日本の消費者が化け物になった理由の一つは、彼らのわがままを通してきたことにもよります。（徳野 63）

農産物の販売者、また食品産業や外食産業にとって、自分で漬け物やおもちを作れず、普通の料理ができない「消費者」は、勿論、大歓迎である。生産者と消費者の専門分化は、無知でわがままな「化け物」のような消費者を育て、「化け物」のような消費者のおかげで農産物の販売者、食品産業や外食産業の売り上げは拡大し、食品輸入額も膨張してきた。徳野は、さらに続けて嘆く。

「農業は自然の摂理に従うべきだ」「食べ物は安全でなければならない」

と言った同じ口で、

「いつでもトマトを食べたい」「冬でもスイカがほしい」「12月でもイチゴを作れ」と要求します。これは、自然の摂理に則っていません。しかし、要求されるから生産者はビニールハウスでこれを作る。すると今度は、

「野菜に季節感がなくなった」

と1年中トマトを食べられるようにした生産者が悪いようなことを言う。こういうわがままな消費者を、ほんの30～40年で作ってしまったのです。

（徳野 64）

日本の工業主義的社会は、専門分化によって、わがままな消費者と同時に、需要があれば何でも市場に出す専業農家をも作ってしまったと言う方が正確であろう。注目すべきことは、徳野が「ほんの30～40年で」と言っている点である。彼は、消費者と専業農家の分化が起こったのは、高度経済成長期（昭和30～40年代・1955～1975年）のことで、それ以前には純然たる消費者はほとんど存在せず、大部分は種々の兼業農民だったと考えている。江戸は大都市で、そこには消費者がいたではないかという問に対し

では、「武士や商人は当時の人口の5パーセント程度です。しかも、武士の7割は、自分でも食料を作っていました」（徳野 26）と答えている。また「武士というか兵士は農民が武装したものでした」とも述べている。(21) つまり日本には、人口のほとんどが農民によって占められる社会と農的生活が、高度経済成長期までは存続していたということである。とすると、高度成長期以後ほんの30～40年間は別として、大部分に渡る日本の文化は農の営みが作り出したとって過言ではない。農の営みが衰退すれば、日常生活から人間らしさが消え、「化け物」の集まりのような消費社会が現れ、日本の文化が空洞化することは確実であろう。

3. 農的生活とコミュニケーション

米国のカウンターカルチャー（対抗文化）を担うウェンデル・ベリーの農的生活主義と軌を一にする日本の動向の中に、藤本敏夫（1944-2002）がいる。藤本は、有機農業普及を目指す「大地を守る会」や農事組合・自然生態農場「鴨川自然王国」を経営するなど、持続循環型社会の推進に尽力し、農的生活の豊かさをアピールした人物である。彼にとって農業は、コミュニケーションメディアである。

農業は宇宙と人間のコミュニケーションメディアとして、人々の創造性を喚起し、大きな生命連鎖、輪廻の中にわたしたちを誘導します。（『現代有機農業心得』30）

コミュニケーションという用語を議論に導入する意義はいくつかある。藤本は農林水産省への建白書の中で、「生産者と消費者を「生活者」という共通の土俵で連携させること」（『農的幸福論』202）を強調し、専門分化した者同士を連携させること、すなわちコミュニケーションの大切さを訴えた。

無秩序な乱開発で、その土地の自然と歴史を喪失してしまった日本の地域社会を、農工一体の「持続型循環田園都市」として再構築することができれば、文化の伝承とともに「健康と環境」を保全する地域社会モデルが創り出せるでしょう。（『農的幸福論』201）

コミュニケーションにはまた、このように、孤立した今日の人間を新たにローカルコミュニティ（地域共同体）に結びつけ、農と工を調和させようというねらいもこめられている。「持続型循環田園都市」というのは、藤本の発案したもので、都市の住民がアマチュア農民として、プロ農家の指導を受けながら周辺の田園地帯に通って農的生活を営むと

いう構想である。都市と田舎、工と農の交流という意味で、コミュニケーションがこの構想のキーポイントになっている。

アマチュア農民として農的生活をする都市の住民を、藤本は「ウェルネスファーマー」という造語で呼んだ。「ウェルネスファーマー」には、新規就農者の他、別に定職を持ちながら農業に携わる兼業農家や、趣味として農的生活を楽しむ人も含まれる。

専門農家の急速な減少と高齢化により担い手を失いつつある日本農業にとって、就農希望者を広くリクルートする環境整備はとても大切だ。

そのためには、一直線に生産農家となるための手だて、方法の国民的な提示も必要ですが、「自然に親しみたい」「農作業を楽しみたい」という農的生活への興味と関心を多種多様に汲み上げ、プロ農家を支える広い裾野を作ることも考えねばなりません。

「ウェルネスファーマー」は子供たちの生命教育、家族の健康など、生活者の直面する問題解決のために、国民の生活の中に農的世界を導入して、「健康」と「環境」を保全するライフスタイルであるとも言えます。したがって、農林水産省としては、日本国民全員が何らかの形で「ウェルネスファーマー」となるよう提唱してゆかなければなりません。

(『農的幸福論』198)

これは、コミュニケーションを始めようという日本国民全員に向けての提案である。それでは、なぜ農的ライフスタイルが「生命教育」「家族の健康」「環境」を保全するのかというと、藤本は次のように考えている。

「食べもの」なくして人は一日たりとも生きてゆくことができません。更に、人間は食物連鎖の高位に位置する有機生命体ですから、人間の「食」は地球上の全生物の生命活動の結節点となっており、その「食」を安定化するための方法である「農業」もまた、人間と社会と自然の関係において重要な結節点とならざるを得ないのです。

なぜなら、農業のみが太陽エネルギーを有機物に固定するシステムであり、他の産業はその上に立ってエネルギーの形態変化を行っているにすぎないからです。(『農的幸福論』189)

この一節の根底には、エネルギーや生命の交換・循環という意味でのコミュニケーション

ン概念が横たわっている。また食と農業が「最も始原的」で「重要な結節点」であることについての理解・意識の拡張および共同体意識形成という意味でのコミュニケーション概念も、横たわっている。それゆえにこそ、前に引用したように、「農業は宇宙と人間のコミュニケーションメディアとして、人々の創造性を喚起し、大きな生命連鎖、輪廻の中にわたしたちを誘導します」と述べるのである。農的ライフスタイルが「人々の創造性を喚起し、大きな生命連鎖、輪廻の中にわたしたちを誘導」できるとすれば、それを「生命教育」「家族の健康」「環境」の保全へ結びつける発想は納得できる。

藤本は、問題解決のキーをコミュニケーションと捉えている。最初に取りあげたアメリカの環境文学者、ウェンデル・ベリーは、それを「つながり (connections)」と捉えている。ベリーは、「人間と土地とコミュニティを結びつけるつながり」「精神と身体、自分の身体と様々な他の身体、身体と大地の間のつながり」等々、何度も「つながり」の重要性を説いている。藤本の場合コミュニケーションは人間を「創造性」「大きな生命連鎖、輪廻」へと誘導するものである。また藤本にとって「創造性」「大きな生命連鎖、輪廻」に加わることが農的幸福であり、豊かさである。一方、ウェンデル・ベリーの場合「つながり (connections)」は、人間を「世界創造 (Creation)」の秩序の中へ誘導する。

我々は大地から生じ、大地に戻る。だから我々は肉体の中で生きているように農業の中で生きている。我々が生きている間、我々の身体は動き回る。それは大地の一欠片（ひとかけら）が動き回っているのである。(Berry 93)

人間は大地から生じ、大地にもどるという理解は世界中の伝統的文化の中に発見できるものである。その理解を農業に結びつけることにより、ベリーは現代社会を覆っている健忘症の霧を少しだけ吹き払った。この一節を含む「身体と大地」(The Body and the Earth) というエッセイの中で、ベリーは人間と大地との「つながり」を語るとともに、大きな「世界創造 (Creation)」の秩序の中における人間の小ささを語り、謙虚さの必要を説いている。ベリーにとって、「世界創造」とは、昔々この世の始めに起こった信憑性の不確実な過去の出来事ではない。人間の時間感覚や観察のスケールとかけ離れているがために人間がそれと気づかなくとも、造山運動は現在も刻々と大山脈を隆起させ、水流は次第に溪を削り、動植物は日々進化している。「世界創造」は人間の尺度を超えた規模で休むことなく続いており、現在も刻々と生命あふれる大地の創造が進行中だ、という理解を彼は抱いている。ベリーにとって、農業を通し、この「世界創造」に「大地の一欠片（ひとかけら）」として加わり、生きることが幸福であり、豊かさで

あると言えるだろう。藤本の『農的幸福論』によれば、農的生活を通し、太古以来休み無く生成変化する森羅万象である宇宙とのコミュニケーションに参加することは、グローバルな経済競争よりもはるかに本質的な喜びをもたらしてくれる幸福であり、豊かさである。

(注：本論文は、2007年10月4日、シンポジオン・ホールにおいて行った平成19年度名古屋大学公開講座・第14回の講演内容をまとめたものである。19年度公開講座のメインテーマは「豊かな生活のために一学問に何ができるのか」であった。)

引用文献

Berry, Wendell. *The Art of the Common-Place: The Agrarian Essays of Wendell Berry*. (『共同の場所で生きる技：ウェンデル・ベリーの農的生活者（アグラリアン）エッセイ集』) Ed. Norman Wirzba. Washington, D.C.: Counterpoint, 2002.

藤本敏夫 『現代有機農業心得』（日本地域社会研究所、1998）

—— 『農的幸福論—藤本敏夫からの遺言』加藤登紀子編（家の光協会、2002）

徳野貞雄 『農村の幸せ、都会の幸せ』（NHK 出版、2007）

宇沢弘文 『社会的共通資本』（岩波書店、2000）